



えいらい

No.49

令和3年10月発行

発行元／一般財団法人永頼会 松山市民病院

秋号
2021



日本医療機能評価機構
認定番号 JC300号

〒790-0067 愛媛県松山市大手町2丁目6-5 TEL / 089-943-1151 FAX / 089-947-0026

発行責任者／理事長 山本祐司 編集／松山市民病院広報委員会

アフターコロナは始まっている

事務長 浅野 光孝



一年延期された、東京オリンピック・パラリンピックもあつという間に閉幕しました。海外観客受け入れ中止や、無観客という異例な開催でしたが、SNSの著しい発達にともなって、スマートフォンのニュースからは否応なしに関連情報が目に入り、良くも悪くもいろいろ考えさせられた大会だったと思います。

東京開催決定直後にシンクタンクが試算したオリンピックの経済効果は、波及効果もあわせて約30兆円規模と期待されていたため、逆に開催後の日本経済に対する見通しが全く立たない、と当時は財界人がこぞって口にしておりました。現実には予期せぬコロナ禍により、人類が一進一退の攻防を続けています。

コロナ禍前の日本経済はどういう状態であったのか。IMF(国際通貨基金)統計によると、2010年から2019年への名目GDP(国内総生産)の上昇率は、アメリカ+43%、中国+140%、韓国+44%に対して、日本はマイナス10%となっています。G20の中でも全く勢いはありませんでした。一般論として、コロナ終息後に、過度な期待は持てないことがわかります。

ビジネス界では「先を読む」から「先が読めないことを前提にした経営」へといわれていますが、現在もふくめて、アフターコロナでは、法人をとりまく様々な環境に対して、つねに予期せぬ変化が起こることを前提としながら、臨機応変な対応ができる組織づくりが強く望まれることとなりそうです。

ところで、近年、人材採用が思わしくないような感覚が否めません。しかも、じわっ、とではなく、いつからか急に難しくなったような気がいたします。雇用

してもうまく定着せず、教育もじっくりいかない。

この理由を端的に表すと、「画一的な採用と均質的な人材育成の限界」と「価値観の多様化によるマネジメントの複雑性」ということになると思います。先が読めないこの世の中で、採用する側が、される側個々に対しての、明確な目的意識をもたないリクルート活動や採用後の教育システムに限界がきていること。そして、私たち世代がとおってきた労務管理をいかに応用させても、やはりそれは時代遅れであること。

アフターコロナを生きるには、パラダイムチェンジが必要です。男女を問わず新しい感覚をもった若手の積極的な登用や、既存の仕組みにとらわれないデジタル化を着想・実行できる人材を求めたいところです。

理事長応接室に、「仁者天下無敵」という村上三島書の額が掲げられています(この書については、「えいらい遺産」のコーナーでご紹介しておりますので、是非ご覧ください)。調べると、孟子を出典とした言葉で、「仁の心をもつ人は、だれにでも愛され、敵になる人はいない」という意味だそうです。

「仁」という字は、人(にんべん)が二つ、とありこれは、他人を我がこととして感じ、大切に想うこと、すなわち「思いやり」です。当院の理念の中でも重要なキーワードのひとつですが、人として大事な教えであるとともに、医療や福祉の世界でその根本に存在する、すばらしい言葉です。

感染患者の受け入れや予防接種対応等、医療従事者の皆がそれをまさに今も体現しています。国民みんなが「仁」のココロに思いをはせて、1日も早い終息に努め願うところです。